

2025年9月14日 第二礼拝 ～敬老感謝のとき～

説教題『「命の導き手」への賛美』使徒言行録9章36～43節

主任牧師 加藤 誠

「やもめたちは皆そばに寄って来て、泣きながら、ドルカスが一緒にいたときに作ってくれた数々の下着や上着を見せた。」(使徒言行録9:39)

福音書は賛美で始まっていることをご存じですか。ルカ福音書の1章2章ではマリヤが賛美し、ザカリヤとシメオンが賛美し、天使や羊飼いたちも賛美しています。ヨハネ福音書の冒頭も「キリスト賛歌」と呼ばれる賛美歌です。ルカもヨハネも、キリストを語るのには賛美から始めるのがふさわしいと考えたのでしょう。賛美歌は人間の業ではなく神の御業をほめたたえるものです。礼拝も、賛美をもって人々を招き入れ、賛美をもって人々を送り出します。礼拝から始まる一週間が神を賛美する日々となるように。自分がどれだけ頑張ったかではなく、神の恵みと働きを見出して賛美する日々となるように。キリスト者はそのように神を賛美する人生に招かれています。さて、私たちの日々は神を賛美し、神を証しする日々になっているでしょうか。4年前、大谷レニー先生を看取った時のこと。ホスピスの病室で恵護先生と弘道さんと「いづくしみ深き」「罪ゆるされしこの身をば」「いつも喜んでいなさい」を賛美している最中にレニー先生は静かに息を引き取られました。神の愛に生かされ神の恵みを最後まで生き切った人の静けさと荘厳さにつつまれた最期でした。そのように最期まで地上の歩みを主への賛美をもって歩むことができたなら、どんなに幸いかと思います。

今朝と一緒に読んだ使徒言行録9章に一人のキリスト者が紹介されています。タビタという女性で、ギリシャ語のドルカス（「かもしか」の意味）とみんなから呼ばれていた。あだ名だったのでしょうか。だとすると、彼女はきゃしゃな体で、人々の間を軽やかに動いて回る女性だったのかなと想像します。そのドルカスが病気になって亡くなります。教会の人々はリダの町にいたペトロを呼びに行き、ペトロが到着すると、やもめたちが皆そばに寄って来て、泣きながらドルカスが作ってくれた数々の下着や上着を見せた…。二千年前の時代です。女性が一人で生きていくのはとても厳しい時代。ドルカス自身がどういう境遇だったのかは分かりませんが、厳しい境遇を生きるやもめたちを彼女は自分のように愛し、互いに行き来するあたたかな交わりが教会の中に生まれていたのでしょう。やもめたちの悲しむ様子から想像されるのは、ドルカスの暮らしは少しゆとりあるものだったかもしれないけれど、「持てる人」が「持てない人」にする「上から下への施し」のような関わりではなく、主の前で同じ地平に生かされている「姉妹同士」として、主から受け取った恵みと励ましをお互いに分かち合う。そういう平らな関係の中で、ドルカスは自分に与えられた裁縫の賜物を生かしていた姿です。きっとドルカスが縫った下着や上着は、それを着る人の体格をよ

く考えて、その人が普段の仕事で動きやすいように工夫された、彼女の一人ひとりへの愛情のこもった一枚一枚であったことでしょう。

『世の光』（2024年10月号）で鮫島泰子牧師（神戸伊川教会）は、ドルカス自身もやもめで、縫製業をなりわいとし、昼間の仕事が終わった夜に、教会の姉妹たちを覚えながら針と糸を持ち、愛を込めて下着や上着を縫ったのではないか。その時ドルカスは心の中で主イエスとおしゃべりしながら針仕事をしたことだろうと想像されています。そして、やはり主イエスとおしゃべりしながら信仰生活を送られた教会員のSさんの証しを紹介されています。戦争と戦後の混乱を生きてこられたSさんは、十代で洋裁師に弟子入りし高齢に至るまで細腕一つで身を立ててこられたけれども、決して人との付き合いが上手な方ではなく、二十歳でキリスト者になられた後、教会の人間関係につまづいてしばらく教会を離れた時期もあったそうです。が、「命の導き手」であるイエスさまから生涯離れることなく、八十四歳の誕生日に次のような「祈り」を教会に残されたそうです。「値なく、勲（いさお）しなかったけれども、永遠にメルキデゼクに等しい大祭司なるイエスさまが共にいてくださるゆえに、八十四年のこの生涯、赦されて生かしてくださいました。幾重にも感謝いたします。自分自身に失望します。けれども尊い十字架の贖いを信じます。望んでいる事柄を確信し、まだ見ていない事実を信じつつ、荒れ野を旅することができますように。」

Sさんの証しの「自分自身に失望します。けれども尊い十字架の贖いを信じます」という言葉が深く残りました。そしてドルカスの奉仕の原点もここにあったのではないかと思います。つまりドルカスは裁縫の才能があり、その働きが人々に喜ばれ、その死が悼まれて、ペテロによって生き返らせてもらった…という話ではない。教会の奉仕は、才能ある人がその才能を用いられて人々に貢献し喜ばれるものとは違うからです。才能ある人がその才能を用いられるのなら会社と同じです。教会において大切なことは、才能ではなく祈りです。うまい下手ではない、祈りがあるかないかです。上手に賛美できるかではない、そこにどれだけ深い祈りと神への賛美が込められているかです。なぜならSさんが書かれているように神の前でわたしたちは「自分に失望する罪人」だからです。しかし、その罪人の罪を贖ってくださる十字架の主によってわたしの命、存在が誰かの命を支え合うものとして用いられる。用いてくださる主を喜び、賛美する。つまり「罪人としての自覚と、罪を贖ってくださる主への賛美」が「値なく、勲しない者」の働きを教会の奉仕とするのです。「命の導き手」（使徒3:13）は「命の創始者、命の根源」という意味。命を創ってくださった方が各々の人生に命の奇跡を起こしてくださる。ドルカスに「もう少しあなたの働きがあるよ」と言って教会の交わりに戻してくださったのは「命の導き手」なる主です。この主を賛美しながら、自分に与えられた主の恵みを証し、互いに分かち合っていきたいのです。